個々のかな文字の読み, 単語文字列の意味理解, 音節分析——天野氏の反論に対する見解——

武蔵野女子大学 大六一志

Reading a single kana letter, comprehending written words, and conducting syllabic analysis: A rejoinder to Amano's comment (1999)

Hitoshi Dairoku (Department of Human Studies, Faculty of Human Studies, Musashino Women's University, Shimmachi, Hoya 202-8585)

In this rejoinder, the author replies to the arguments made in Amano's comment (1999) on the author's paper (Dairoku, 1995). (1) Dairoku (1995) named, perhaps incorrectly, the Amano theory as "kana naming" hypothesis, because the theory was not accompanied by data showing that reading a kana syllabic letter involved more processes than kana script naming. (2) Amano divides reading a single kana letter into primitive and proper types, but it would be a tautology if the difference between them is defined in terms of syllabic analysis. (3) When Dairoku (1995) used the term "awareness of morae," his intention was that it included a synthetic process. (4) The study (Dairoku, 1995) investigated reading comprehension without referring to a synthetic process, because its purpose was to find out a requisite for understanding written words, and not to study the process underlying it. (5) The same study (Dairoku, 1995) included an associative learning task between sounds and letters. The task might seem incoherent from the phonological viewpoint concerning reading instructions, but could be useful in showing that instructions without regard to phonological skills indeed had their limits. Finally, the author offers an apology and correction for some misleading characterization of Amano's theory in his previous paper (Dairoku, 1995).

Key words: syllabic analysis, phonological awareness, kana letters, reading comprehension, syllabic synthesis.

筆者は1995年の論文で(大六, 1995), 個々の文字は読めるが単語や文から意味をくみとれない発達遅滞事例の存在に注目し, モーラ分解と抽出の訓練を行ったところ, 事例は単語の意味を理解できるようになった。このことから, モーラに対する意識(天野氏の用語では音節分析)が個々のかな文字を読むための必要条件であるとする天野氏の従来説を否定し, モーラ意識は単語や文を理解するための必要条件であり, 個々の文字の読みはモーラ意識とは独立に習得されうると結論した。

本論文では, 上記の論文に対する天野氏の反論を受け, 筆者の見解と誤解の訂正を述べ, 今後の研究の方向を示す。

なお, 大六(1994, 1995)では“モーラ”という語を用いているが, これらの論文が扱った基本音節文字習得の段階では, モーラも音節も実質的に違いがない。筆者はモーラという語を用いた方が国語学的に正確だという判断に基づきこれらの論文を執筆したが, むしろこの発達段階における子どもの音韻意識は音節に対するものであり, 特殊音節表記の習得を通してモーラに対する意識に再編成されることが示唆されている(Takahashi, submitted; 天野, 1986, pp. 296-372)。したがって, 本論文ではこの点を改め, “音節”という語を用いることにする。

かな文字の読みの習得と音節抽出

天野氏が指摘した第一の問題を要約すると, 以下のようになる。(1)天野理論は単なる個々のかな文字の呼称を対象としているのではなく, したがって“かな呼称”仮説と呼ぶのは間違っている。(2)天野理論では, 音節分析(大六, 1995, におけるモーラ意識)獲得以前の単なる文字の呼称は“原始的な読み”と名づけて, 本格的な読みと区別している。

これら二つの問題について以下に検討する。

(1) 個々のかな文字の読みにおける呼称以上の過程

天野氏の指摘にもあるように, 天野(1986)は“文字の習得とは, 単に文字の音価を知ること……ではなく, ……語の有意意味なコトバを構成しているさまざまな言語音の中から, 一定の音韻……を抽象して, それを文字記号として定着していく過程”(p. 86)と定義している。換言すれば, 文字を読むというのでは, “あ”という文字を見て単に/ア/と言えるだけでなく, /アヒル/の/ア/も, /アメ/の/ア/も, 同じ/ア/という音であることを知った上で, その音を表す文字が“あ”であることを知ることである。つまり, 個々のかな文字が読めることの中には, 音節分析が含まれることが前提となっている。

このような前提ゆえに, 天野氏の研究では, 音節分析の発達水準と読めるかな文字の数との関係を解明す

ることに力が注がれている（天野，1970，pp. 18-21；天野，1986，pp. 130-144，pp. 215-282；天野，1993，pp. 42-50）。しかしこれだけでは、個々の文字の読みにおいて、単に音価を答える以上の過程、つまり単なる呼称以上の過程が実際に含まれているかどうか、証明されているとはいえない。これが、筆者が天野理論を“かな呼称”仮説と呼んだ理由である。

もちろん、天野氏自身が定義に基づいて“天野理論はかな呼称仮説ではない”と述べている以上、そう呼ぶのは正しくなく、したがって天野氏の理論を“かな呼称”仮説と呼ぶことは取り下げる。

(2) 原始的な読み

天野氏の指摘にもあるように、天野氏は音節分析習得以前のかの文字の読みを“機械的連合メカニズム”（天野，1977）による読み、あるいは“原始的読み”と呼び、音節分析習得以後の本格的な読みと区別している（Figure 1）。大六（1995）でこの点を紹介しなかったのは筆者の手落ちである。

ただし、実際問題として、個々のかな文字の読みだけを縦断的に追っていく場合、どこまでが原始的読みで、どこから本格的な読みになったのか、外見上区別することは難しい。少なくとも大六（1995）の事例TYにおいてはよくわからなかった。にもかかわらず、天野氏のように音節分析習得以降の読みを本格的な読みであるとするのは、かな文字の読みに必然的に音節分析がともなうと仮定している以上、トートロジーに陥ってしまう。これを回避するためには、個々の文字の読みそれ自体に、音節分析以外で定義される変化が見出されなければならない。

一方筆者は基本的に、Figure 1 に示すように、(1) 個々の文字を音に変換する情報処理過程自体は、音節

分析の習得の前後で変化はなく、基本的に対連合学習であり、(2) 音節分析の習得で変化するのは、単語を構成する音を認識し、それと文字から変換された個々の音とを比較対照する過程である、と考えている。つまり、子どもによっては、“あ”を/ア/と読むことを先に学んだ後で、/アヒル/の/ア/も、/アメ/の/ア/も、同じ/ア/という音であることを知る、ということが起こりうると考えている。そして、事例TYもそうした子どもの1人と考えている。

はたして、音節分析の獲得の前後で、個々のかな文字の読みに質的变化が生じるのか否か、それは今後の検討課題である。また、これに関連して、原始的読みと本格的な読みとで、文字によって喚起される音の表象は同じなのか違うのか、もし違うにしても、前者における音の表象が何らかのかたちで後者における音の表象の形成に影響を及ぼすのか、という問題がある。天野氏は違うという立場であり、筆者は同じという立場になると考えられる。これも今後の検討課題である。

語の読解過程と音節分析

天野氏が指摘した第二の問題を要約すると、以下のようになる。(1) 大六（1995）は文字列の意味の理解を扱っているわりには、総合過程に言及していない。(2) 天野氏が総合過程を中心とした理論過程のモデルを提示しているのに（天野氏の反論論文，Figure 2；天野，1988，第2図），大六（1995）はそれを無視している。(3) 大六（1995）は個々のかな文字の読みを対連合学習として教え、単語文字列の読解のために音節分析の訓練を行うという、音声法の立場から考えて整合性のない二元論になっている。

Figure 1. Two views concerning the relationship between single kana letter reading and reading comprehension.

これら二つの問題について以下に検討する。

(1) 語の読解における総合過程

天野 (1988, 1993) によれば、音の分析と総合の技能が出そろって読解に至るということであり (天野氏の反論論文, Figure 2; 天野, 1988, 第2図), その点には筆者も異論はない。そもそも、大六 (1995) において、“モーラ分析”ではなく“モーラ意識”という表現を用いた意図は、そこに分析と総合の両過程を含めるためである。

また、同論文の目的は、理解に含まれる音節分析と音節総合の過程を検討することではなく、それよりさきにも、音節分析を初めとする音韻意識が個々のかな文字の読みの必要条件ではなく、文字列の読解の必要条件であることを示すことであり、読解に含まれる過程の詳細な検討はそのさきの問題のつもりであった。したがって、大六 (1995) において天野 (1988) の第2図を引用しなかった理由は、総合過程の問題は論文が扱う範囲外だったためである。実際には事例TYにはblending testを用いて総合過程について調べていたが、音節分解と抽出よりも先に習得されたため、読解の必要条件となっているかどうかは明確にならず、紙数の都合で言及しなかった。

なお、天野氏の指摘にもあるように、分析過程と総合過程の関係については、興味深い課題が残されている。たとえば、総合過程は分析過程とは独立に発達するのか、それとも総合過程は分析過程から派生してくるのか、ということは興味ある問題である。

(2) 読解過程のモデルと要因間の因果の図式

天野 (1988) の第2図 (天野氏の反論論文, Figure 2) の存在にもかかわらず、大六 (1995) のFigure 1においては、天野理論を紹介する上の図で、“個々の文字の読み”と“単語の理解”の間が“?”にされている。天野氏はこれを、筆者の理解不足による誤った記述であると指摘している。しかし、大六 (1995) のFigure 1は要因間の因果 (あるいは必要) 関係を示す図式であり、読解過程のモデルではないので、天野 (1988) の第2図のような読解過程のモデルと比較検討するのは妥当ではない。

因果関係に関していえば、読めるかな文字の数と文字列の意味理解との関係を検討した天野 (1986, pp. 189-205) や天野 (1993, pp. 71-72) では、両者の関係や、それと音節分析・総合との関係は、必ずしも明確にされていない。たとえば、天野 (1986, p. 197) では、C水準 (読める文字の数が6-20) の幼児は、単語を読んで理解する課題に10%以下しか正答できていないが、D水準 (読める文字の数が21-59) になると正答率は70%近くに急上昇している。天野氏の理論にしたがえば、C水準とD水準との間で音節分析・総合に何らかの変化があったことが予測されるが、この点に関する検討はなされていない。“個々の

文字の読み”と“単語の理解”の間に“?”を付したのは、このような理由による。

大六 (1995) のFigure 1に関する筆者の意図は以上のとおりであるが、必ずしも筆者の意図が十分に伝わる表現にはなっていなかった可能性は考えられる。特に、天野氏の理論を紹介した図で、“個々の文字の読み”と“単語の理解”の間を“?”にしたことは、天野氏が読解の問題を扱っていないかのような印象を読者に与える可能性が考えられる。すでに述べた“かな呼称”仮説という名称も含め、この図に“BY AMANO (1986)”と記載したのは適切ではなかった。

(3) 対連合学習と音声法的指導

天野氏の指摘にもあるように、音声法の立場に立つて教育を行うならば、対連合学習による個々の文字の指導という発想は出てこない。それにもかかわらずあえて大六 (1995) において対連合学習が行われた理由は、この論文が音声法の枠組の中での研究を目指したのではなく、むしろある意味で、音声法から逸脱した場合の限界を示すことを目指したためである。

もちろん、対連合学習という、あらかじめ非効率的であることが予測される方法を用いてかな文字の教育を行うことには、倫理的問題がある。事例TYの場合は、文字の指導を目的として対連合学習が行われたわけではなく、構音の指導の一環として、発音を誘発する手段としてかな文字を用いたところ、たまたま文字と音との対連合学習が、語の音声的側面に気づくことなく進んだものである。

以上、天野氏の反論に対する筆者の見解と誤解の訂正を述べ、今後の課題を示した。大六 (1995) は、天野理論に含まれるまだ実証されていないいくつかの重要な前提について、他の考え方の提示と証明を試みたものである。天野理論全体に取って代わるものではなく、天野理論の価値を損ねるものでもない。筆者の拙い表現により天野理論が誤って伝わったとすれば、それは筆者の本意ではないので、率直にお詫び申し上げる次第である。

引用文献

- 天野 清 1970 語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習 教育心理研究, 18, 76-89.
- 天野 清 1977 中度精神発達遅滞児における語の音節構造の分析行為の形成とかな文字の読みの教授・学習 教育心理研究, 25, 73-84.
- 天野 清 1986 子どものかな文字の習得過程 秋山書店
- 天野 清 1988 音韻分析と子どものliteracyの習得 教育心理学年報, 第27集, 142-164.
- 天野 清 1993 子どもの読みの習得過程についての発達の・実験的研究 平成4年度文部省科学研究費

一般研究(B)研究成果報告書

- 大六一志 1994 かな文字の読み習得の必要条件——
モーラ分解および抽出は、かな単語を理解するための
必要条件である—— 人文科学科紀要第100輯
(東京大学教養学部) 心理学IX・教育学I, 55-77.
大六一志 1995 モーラに対する意識はかな文字の読
み習得の必要条件か? 心理学研究, 66, 253-260.

Takahashi, N. (submitted) From syllable to mora:
Developmental changes in phonological awareness
through learning the kana script among Japanese
children.

——1998. 9. 7 受稿, 1999. 1. 23 受理——